太宰府の文化財 411

梅香苑夏まつり子どもみこし
～太宰府市民遺産第14号～

昨年、自治会としては初めて、梅香苑区自治会が市民遺産を提案し、認定されました。梅香苑区で昭和57（1982）年頃から続けられている、夏祭りでの子どもみこしです。

市の南東部に位置する梅香苑区一帯は、かつては山林と田畑でしたが、昭和46（1971）年から昭和50年代前半にかけて宅地開発が行われ、現在のような住宅地になりました。新興住宅地であったために初めは住民同士のつながりが希薄な状態だったといいます。やがて公民館が新設されると、地域住民が一体となって、さまざまな行事が計画されるようになりました。そんな中、〝子ども達に故郷の思い出を残してやりたい〟という思いから始まったのが、子どもみこしでした。

みこしを引く紅白の綱を作成する区民ら

みこしの修理

当初はたるを乗せた質素なみこしで、太鼓や法被（はっぴ）を太宰府天満宮から借りて行っていましたが、その後、地域の人たちでみこしを手作りし、太鼓や法被なども揃えていきました。年を重ね自慢のみこしも傷んできたため、平成29（2017）年には、住民らの協力で台車を新設し、みこしも修復されました。

いまや梅香苑区の夏の風物詩となっているこの子どもみこしは、8月第1土曜日の午前中に行われます。みこしは梅香苑第1公園を出発し、鐘、太鼓、みこしと並び、その脇では大うちわと旗を掲げ、子どもたちが皆「わっしょい！わっしょい！」と元気に声をあげながら、上り下りのある団地内を練り歩きます。そのコースは年ごとに参加する子どもの居住地をできるだけまわるように設定され、沿道の家々からはバケツやホースで力水が浴びせられます。

梅香苑区自治会は「子どもみこしに込められた先人たちの思いを、これからも住民一体となって未来に伝えていきたい」という強い思いから、昭和53（1978）年に区ができてから40年という節目に市民遺産を提案しました。本年3月の認定書授与式では、地元の子どもたちも参加して、実際のみこしをかついで会場を盛り上げてくれました。

太宰府市民遺産は、市民ひとりひとりが大切に思い、未来の太宰府に伝えていきたいと思う地域のたからです。ぜひ、皆さんもお近くの文化遺産に目を向け、地域の魅力を再発見してみませんか。また、「太宰府市民遺産」とは何かを解説する動画を、YouTubeにて公開しているほか、市民図書館でDVDを貸し出していますので一度ご覧ください。

文化財課　遠藤　茜

お知らせ

9月16日（月・祝）まで、文化ふれあい館にて太宰府市民遺産全14件を紹介する展示を開催しています。ぜひお越しください。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 412

原山古図 ―山岳寺院「原山」を描いた絵図―

原山古図は、現在の太宰府市三条から連歌屋に広がっていた、古代から中世の山岳寺院「原山」を描いた絵図です。寸法が縦62・6㎝、横70・2㎝、基本的には墨で描かれ、斜面などに淡い色が塗られた紙本墨画淡彩と呼ばれるもので、江戸時代の後半に描かれたと考えられます。

山岳寺院「原山」は、これまでの発掘調査により、主要な箇所は14世紀代には衰退したと考えられることから、この絵図が描かれた時代には本堂などの建物はなく、堂舎の基壇や参道などの地形だけが残っていたようです。この地形と、伝えられてきた堂舎の配置などから、建物が描かれたと考えられます。

現在、山岳寺院「原山」が広がっていた場所は、住宅地となり山岳寺院の様子を思い浮かべることは難しい状況ですが、住宅地の中に見られる段状の地形や道、池などの中には原山古図と一致する箇所が見られ、原山古図は当時の地形を現在に伝える貴重な資料となっています。

現在、太宰府市文化ふれあい館で「まるごと太宰府歴史展2019」を開催しています。今回の展示では、原山の近年の発掘調査の成果を紹介するとともに、「原山古図」も展示しています。展示をご覧いただき、当時の様子を感じていただけたらと思います。

文化財課　沖田　正大

原山古図（個人蔵）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 413

陣ノ尾1号墳の副葬品

陣ノ尾１号墳出土遺物

陣ノ尾１号墳は、国分小学校の麓にある６世紀末頃に築かれた古墳です。直径約12ｍの円墳で、古墳の内部には大きな石を使って築かれた横穴式石室があります。石室は開口しており、現在もその様子を見ることができます。発掘調査時にはすでに盗掘を受けていましたが、副葬品が出土しています。

今回はこの古墳から出土した副葬品をいくつか紹介します。

［土器］ ①、②は須恵器という焼き物です。とても硬く、青灰色をしているのが特徴です。①は坏という供膳具で、蓋と身がセットになります。②は平瓶または横瓶といい、水や酒を入れたと考えられている貯蔵の器です。

［鉄製品］ ③は鉄鏃です。左端が鏃の先端になります。いくつかの鉄鏃には糸で巻かれた痕跡が残っているものがあり、柄に装着する際、固定させるために巻いたものかも知れません。④は鉸具という馬具の金具の一つです。現在のベルトのバックル部分にあたります。

［装身具］ ⑤は耳環という当時のイヤリングです。銅に金箔を張り付けた金銅製で、大きさは３㎝前後、５～７㎜の厚さがあります。一部金箔が剥がれ青色の錆が見えますが、残りの良いものは現在も黄金色の輝きを見せています。

これら副葬品は考古学研究によって、いつ頃のものかおおよそわかります。例えば、須恵器の坏の形や大きさから６世紀末頃のものと考えられます。この頃は一般的に鉄鏃が大型化していく傾向にあることがわかってきています。また、古墳の多くに鉄鏃が副葬されるようになります。このように、陣ノ尾１号墳の副葬品も古墳時代後期の特徴を示すものとなっています。

陣ノ尾１号墳の被葬者については、国分を見渡せる位置にあることから、この周辺地域との関連がある人物と推測されます。副葬品からは、残念ながら古墳の被葬者を特定できるものは見つかりませんでしたが、この地域には、武具・馬具・装身具などを手にすることができる人物がいたようです。

文化財課　中村　茂央

お知らせ

文化ふれあい館では、太宰府の原始から現代に至るまでの歴史を展示した「まるごと太宰府歴史展２０１９」を開催しています。今回紹介した陣ノ尾１号墳出土の副葬品も展示しています。この機会にぜひ、文化ふれあい館までお越しください。

開催期間：11月3日(日)まで

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 414

横岳八幡宮社殿　白川

横岳八幡宮は、太宰府市役所北方の四王寺山南麓の横岳崇福寺跡に隣接してひっそりとあります。神社の創建時期など詳細はわかっていませんが、横岳集落の氏神として大切にされてきました。

社殿側面

神社の社殿は狭い境内に東向きに建てられています。拝殿の構造形式は、正面三間、側面四間、切妻造の妻入りで、屋根は桟瓦葺です。正面には向拝（礼拝のために張り出している部分）があり、面取りをした角柱に水引虹梁を渡し、向拝柱上には大斗肘木をのせています。その柱上両側にはやや細長く伸びた木鼻があります。窓は風蝕が目立ちますが、連子窓となっています。拝殿内部をのぞくと、天井は棹縁天井で、床は板張りとなっていて、かつてはここで、お籠りなどの神社の行事や集会などが行われていました。

社殿正面

拝殿の奥には、ご神体を祀る神殿（本殿）があります。現在は拝殿の中に取り込まれていますが、当初は、拝殿から張り出していた状態もしくは離れて建っていた可能性があります。神殿の構造形式は、一間四方で、入母屋造か寄棟造とみられます。四隅の柱は円柱で、柱上には平三斗を置き、木鼻があります。神殿は非常に残りが良く、厳かな雰囲気を残しています。

神殿上部の造り

この社殿について、本格的な調査は行われてないため、わからないことも多いのですが、神殿は、木鼻の渦の彫りがやや浅く、きれいな円を描いていないこと、そして、拝殿入口上の虹梁の模様（絵様）が渦と若葉がつながり、花のような形になっていることなどから、18世紀前半頃の建築と推測されます。これは、観世音寺北側の日吉神社拝殿（正徳４〈１７１４〉年）と同時期に建築されたものかもしれません。しかし、向拝については、水引虹梁の絵様が、拝殿の虹梁より彫りが深く、若葉の雰囲気が失われ、また、その虹梁両側にある木鼻が細く伸びた感じから、神殿や拝殿が造られた後に、遅れて建築されたことがわかります。

横岳八幡宮社殿は全体的にシンプルな造りで派手さはありませんが、風雨に耐え、細くなった柱が物語るように、太宰府市では数少ない江戸時代に建築された社殿として大変貴重なものです。

文化財課　宮崎亮一

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 415

古代大宰府の官庁　蔵司跡

古代の大宰府は九州各国を統括する官庁としての機能があり、記録から学校院（府学校）、兵馬所（兵馬司）、蕃客所、主厨司、主船司、匠司、修理器仗所、防人司、警固所、大野城司、薬司、主神司、蔵司、税司、大帳所、公文所、貢上染物所、作紙所、貢物所、政所などの行政を担当する部署があったとされ、また、大判事、陰陽師、算師をようする官庁などもあったとされています。このように大宰府には都と並ぶ官庁街があったと考えられており、特別史跡大宰府跡やその周辺にこれらの役所があったとされています。

発掘調査中の蔵司跡（北西から見た礎石建物）

なかでも蔵司は大宰府の財政を担う機関で、九州各地から集められた絹などの特産物などを収蔵・管理し、役人に季禄という報酬を現物支給で分配する行務などがおこなわれていたとされています。学業院中学校と大宰府政庁跡に挟まれた丘陵にその地名が残り、丘の上に礎石が残されていたことから、古くからこの場所が「蔵司」跡であると思われてきました。長らく個人の所有地でしたが、土地が公有化された後の平成21年度から九州歴史資料館によって計画的な発掘調査が始まり、じょじょに蔵司跡の古代のようすが明らかになってきました。

蔵司の丘陵は南側には5つの平坦な土地が段差をもって東西に広がり、北西側に巨大な瓦葺の礎石建物が検出され、その南側は広場のような空間になっていました。礎石建物は政庁正殿をしのぐ規模の建物で、その用途は倉庫や政務をおこなう管理棟、外国使節の饗応施設などの複数の考え方があります。平坦地の中央から政庁のある東側には中央に広場を持ち、「コ」の字に配置された6棟以上の瓦葺の礎石建物が見つかっています。礎石建物は建物の側だけでなく建物内にも碁盤の目のように礎石を配置した総柱という方式のもので、重量物を支える床に適した構造であり、倉庫群と呼ぶにふさわしい建物であったことがわかりました。建物は出土した土器や瓦から奈良時代から平安時代前半期に使用されたものとされています。

調査ではこの建物の下層から7世紀にさかのぼる時代の整地と掘立柱建物が発見され、東側の政庁域と同じく奈良時代より以前から官庁として機能していたことが指摘されています。『日本書紀』天武六（677）年十一月一日条に筑紫大宰に「大宰府諸司人」の記事があり、大宝律令施行以前にこの地に行政機能を担った役所があったことも考えられます。このように蔵司跡から見つかった建物群は時代によりさまざまな性格を帯びた施設であった可能性が考えられ、調査成果に期待が寄せられています。

文化財課　山村　信榮

※現地は調査中で常時公開されていません。現地説明会などは広報紙などで事前にお知らせしています。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

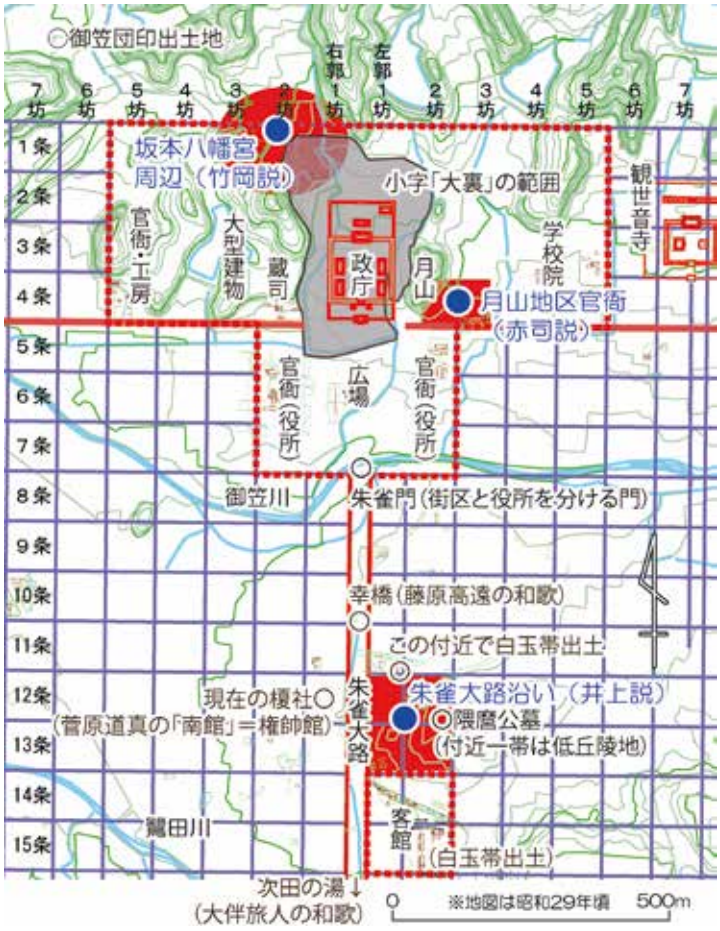
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 416

大伴旅人邸はどこ？

「令和」の新元号となって初めてのお正月です。昨年は、その典拠となった万葉集「梅花の宴」が注目され、宴が開かれた大宰帥（長官）・大伴旅人の邸宅に関心が集まりました。

この邸宅とは、都から赴任してきた官人のために用意された「館」のことです。左遷された権帥・菅原道真が住んだ「南館」（権帥館）もその一つで、大宰府政庁南の朱雀大路沿い（現在の榎社付近）と伝えられています。ただ、旅人邸である「帥館」については、記録も伝承もありません。このためこれまでいくつかの学説が提示されています。



坂本八幡宮周辺と考えたのは、九州大学の竹岡勝也教授です。1952（昭和27）年刊行の自著『太宰府小史』に、政庁跡西北の小字を「大裏（ダイリ）」というと述べ（実際は政庁跡全体がこの小字ですが）、これを天皇が住まう「内裏」に当ると考え、近くに瓦や礎石が見つかった場所があること、旅人が招いて開いた歌会の歌に「わが岡の」や「岡傍には」など丘を記すことを根拠に、「一応この辺」としました。その後九州歴史資料館が、これを検証する目的もあって坂本八幡宮周辺を遺跡調査しますが、想定される遺構は見つかりませんでした。このため1998年、同館の赤司善彦さん（現、大野城心のふるさと館長）は、大宰府史跡発掘30年記念展図録で新説を発表します。赤司さんは、政庁東側の月山丘陵の南東（大宰府展示館の東）の遺跡調査で見つかっていた「月山地区官衙」だと考え、周囲を囲む塀が月山の丘を取り込んでいること、文献に残る都の貴族邸宅の広さとの比較、奈良時代初めの有力者・藤原不比等の邸宅の位置（平城宮の東側）などを根拠としました。ただ、多くの建物跡が時期不明であり、「館」の特徴を備えているわけでもありません。一帯を官衙（役所）の範囲内と考える研究者は少なくなく、昨年度も論文が発表されています。

本市の2014（平成26）年3月刊行の発掘調査報告書『大宰府条坊跡44』の中で井上は、大宰府条坊の朱雀大路沿いという説を述べています。朱雀大路沿いには、「南館」をはじめ、赴任官トップの往来を伝える記録・伝承・遺跡があります。大伴旅人は朱雀大路を南に下った次田の湯（二日市温泉）で万葉歌を詠んでおり、1005（寛弘2）年に赴任した大弐・藤原高遠も、朱雀大路上の「幸橋」を渡る和歌を詠みました。この南東では彼らが締めた腰帯「白玉帯」の白玉が出土しており、その南は朱雀大路沿いでは唯一の丘陵地です。このため榎社の東向かいの、朱雀大路に隣接した一帯だろうと推測しています。ここでは遺跡調査は行われていませんが、多賀城や下野国府など全国の国府でも大路沿いに館があり、可能性はあります。

旅人邸についての主な研究を紹介しました。いずれも今後の調査研究が重要です。

文化財課　井上信正

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 417

四王寺山の三十三石仏
～太宰府市民遺産第15号～

大宰府政庁跡の背後に見える山は四王寺山といい、特別史跡大野城跡※1が所在するほか、山の名前の由来でもある四王院という寺が古代から存在した祈りの山でもあります。この山中には、200年あまり前に置かれた33体の石の観音像からなる霊場が今もあり、「四王寺山観音霊場（三十三観音）」や、「四王寺山石仏」などとして長く人々に親しまれてきました。

石仏が建立された時期は、石仏の台座などに刻まれた年号より寛政12（1800）年を中心とした年代と考えられます。そのいきさつには、江戸時代後期の福岡の出来事が関係します。寛政9（1797）年は梅雨時季の大雨で洪水が起こり死者や家屋損壊と田畑への被害が、その翌年は、福岡の城下町で起こった大火災で民家1千軒が焼失し、同じ年、四番山笠に提灯の火が燃え移って飾り人形が全焼する火事も起こりました。さらに翌年には、天然痘が大流行し、また、豪雨で山笠行事が延期されるなど、多くの災難に見舞われました。このような時代背景のなか、姿を自在に変えて人々を救済する観音菩薩の御利益にあやかろうと博多の浜口町などの主立った人々が発起して、西国三十三ヵ所※2にならった石仏めぐりの札所を四王寺山一円につくることにしました。

そうして、博多の人々に加えて宇美・太宰府などの心ある人々も関わって、この霊場が建立されました。33の石仏のいくつかには、台座に像の建立に関わった人の名や、宰府、桜馬場、国分村、連歌屋といった太宰府の地名も刻まれています。このように昔の太宰府の人々が思いを寄せ、平穏への願いを込めて築かれた三十三石仏を、太宰府の物語として伝え残していきたいと、四王寺山の歴史・文化遺産を学習する市民グループ、四王寺山勉強会が太宰府市民遺産に提案し、昨年夏に景観・市民遺産会議で市民遺産第15号として認定されました。四王寺山勉強会では、三十三石仏の定期的な見守り活動とともに、学習会やウォークを通して三十三石仏とその物語を伝える育成活動をおこなっていきます。

文化財課　遠藤　茜

※1　665年に築かれた日本最古の朝鮮式古代山城
※2　近畿地方一円の有名な観音寺からなる札所

三十三石仏のひとつ（4番札所・千手観音立像）

3番札所・千手観音立像
（三十三石仏のうち、唯一岩壁に彫られたものです）

四王寺山勉強会活動風景

おしらせ

2月29日㈯の「だざいふ景観・市民遺産フェスタ2020」で、「四王寺山の三十三石仏」の一部をめぐるウォークを開催します。詳しくは17ページをご覧ください。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 418

特別史跡水城跡 ―土塁と樹木の関係について―

『日本書紀』天智天皇3年（664）条に伝えられる水城跡は、大野城市と太宰府市にまたがる国指定史跡で、全国に63件しかない特別史跡（国宝と同格）の1つです。水城は、長さ1.2kmに及ぶ長大な土塁（高さ10mほど）と、土塁に伴う外濠、内濠を有し、平野を塞ぐように造られていることから、太宰府地域を守るための防衛施設と考えられています。後に律令制による地方最大の役所である大宰府が置かれると、大宰府の外郭（がいかく）線としての役割も果たしました。

水城跡西門西側　土塁の様子

水城の会　作業風景

さて、現在の水城跡には樹木が繁茂しており、場所によっては土塁の姿が樹木に隠れて見えなくなっています。この樹木は水城築造当初にはなかったと考えられますが、江戸時代に描かれた水城跡をみると、当時の水城跡には松の木が多く生えていたことがわかります。明治時代から第二次世界大戦後までは周辺の村の薪取りの山として、土塁上の広葉樹を中心とした樹木が積極的に利用されていました。しかし、石炭・石油などの新しいエネルギーの台頭により、薪が燃料として使われなくなったため放置された樹木が、現在土塁上に残っているものと考えられます。

都市部の緑地として希少と言われている水城跡の樹木ですが、そのまま放置しておくと台風や災害時に土塁自体を壊してしまう場合があります。土塁を保存するためには継続した樹木管理が必要で、樹木を一定の高さに抑えることや、樹木と樹木の間隔を保つために、現在、市によって樹木の剪定や伐採を行っています。こうすることで樹木の下の空間が明るくなり、下草や腐葉土により土塁の表面を保全することができ、結果として史跡を現在の形のまま保存できます。日常的な枝落としや下草刈りについては市をはじめ、ボランティア団体「水城の会」などが継続的な活動を行っています。

水城跡西門西側の吉松側は、平成30年度から史跡整備工事を始めました。令和2年3月末に園路が完成しますので、4月からは西門跡から太宰府市の吉松側を通って大野城市の水城ゆめ広場へ安全に行くことができるようになります。市民をはじめ地域の皆さんにはぜひ、新しい園路を史跡の散策や健康づくりの場として活用していただけると幸いです。

文化財課　髙橋　学

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 419

新追加指定の文化財 ―山岳寺院「原山」―

山岳寺院「原山」は、四王寺山の南東麓、現在の連歌屋・三条地区の一帯に建立された山岳寺院です。古代の山城である大野城内に建立された四王院(寺)の別院として、9世紀代に天台宗の円珍の弟子が開いたと伝えられています。また、菅原道真の葬儀がおこなわれたという伝承が残されるほか、時宗を開いた一遍が幼少期に修行を行ったことや、室町幕府を開いた足利尊氏が「原山」に一時的に滞在したことなどの記録が残っています。現在でも連歌屋・三条地区の一帯には「原山」に関係する「本堂跡」、「中堂跡」などの石碑や「原山」の僧侶の末裔によって建てられた「原山記念碑」を見ることができます。

近年、「原山」が所在する原遺跡では28箇所で発掘調査が行われ、堂舎と考えられる建物跡や宗教関連の遺物が多く確認されてきました。中でも平成27年度と平成29・30年度に実施した「原山」の本堂伝承地の調査では大型の建物跡や道の跡など重要な遺構などが確認されました。

この度、「原山」が「特別史跡大野城跡」の指定理由に記載されている四王院(寺)と強いつながりを持ち、これまでの調査成果が史跡の歴史を明らかにする上でも重要であると判断され、「原山」の中心的施設が確認された本堂伝承地が令和元年10月16日に「特別史跡大野城跡」として追加指定されました。

文化財課　沖田正大

「原山」本堂伝承地位置図　※●が本堂伝承地

山岳寺院「原山」イメージ図

本堂伝承地での現場説明会風景

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA

太宰府の文化財 420

夜泣き石地蔵　宰府5丁目

太宰府天満宮の北方350m、車が行き交う県道から下った御笠川の傍らに、ひっそりと夜泣き石地蔵という大きな石と祠（ほこら）があります。

その大石は上面が平らになっており、「その平らな石の上に夜泣きの赤ん坊を寝せると、夜泣きがなおる」と言い伝えられています。むかしお参りした後には、七色のお菓子を供えていたそうで、祠の前に置かれているお菓子を見ると、近所の人は「誰か赤ちゃんを寝かせに来たんだなあ」と話していたそうです。現在その大きな石は草木に囲まれ、石の上にのることも見ることも難しくなり、赤ちゃんを石の上に寝かせに来る人はいませんが、今でも傍らにある祠にお参りに来る人はいるということです。

夜泣き石地蔵の祠

上から見た夜泣き石地蔵の大石

このような夜泣き地蔵や夜泣き石と呼ばれるものは全国各地にあり、近隣では大牟田市や佐賀県みやき町にもあります。その中には泣き声が聞こえるという伝承を持つ石もありますが、ここと同じくお参りをすると赤ちゃんの夜泣きが収まるという伝承のものも多く、今も昔も育児の苦労がしのばれる伝承と言えます。

この夜泣き石地蔵の大石は、その周りが宅地の下に隠れるほど大きく、見えているのは巨大な岩のほんの一部と考えられています。古来より、人々は巨石や巨樹に言い知れぬ力を感じ、神が宿ると考えていたように、この大石に不思議な力を感じた人々は、その力に夜泣き解消を期待したのかもしれません。つまり、ここは今でいうパワースポットなのかもしれません。

（都市計画課　宮崎亮一）

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
UD FONT by MORISAWA